Report of Noto Support Project

能登震災支援プロジェクトレポート

02

と　き： 2024年11月12日(火)～15日(金)　　太田直宏（YMCAせとうち代表）

1. 能登支援プロジェクトの概要とYせとうちチーム派遣に至る経過報告

2024年1月1日、「あの発災から11ヵ月たった今も、能登には災害の大きな爪痕があります。」全国YMCAのつながりの中で、そのような声をたくさん聞いてきました。しかし残念ながら、せとうち、そして姫路YMCAからはなかなか現地派遣をすることができず、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。今回静岡県御殿場市のYMCA東山荘で行われる「YMCA大会」に参加することを前提に、チームメンバーを選出し、「能登ヘルプでの奉仕者」として派遣することを決めました。

派遣元：岡山キリスト災害支援室(通称：岡キ災)

派遣先：能登地震キリスト災害支援会(通称：能登ヘルプ)

活動先：石川県輪島市　宮下さんの仮設自宅（元は畑の作業所であった場所）

宿泊先：能登聖書教会（石川県鳳珠郡能登町）

派遣日：24年11月12日夕方　岡山出発～11月14日深夜　能登町出発

2. 具体的作業内容（能登ヘルプの元での現地での支援活動報告）

今回の支援チームの移動は、岡山～姫路～内灘～輪島～御殿場～岡山という長丁場で、移動距離すべてを合計すると2000Kmにもなります。そこで今回はキャンピングカーをレンタルし、車中での仮眠もできる体制で現地入りしました。

①11月12日：

　すべての用意を整え、夕刻に岡山を出発、途中たつの駅で姫路のリーダーをピックアップして夕食。夜通し走り、13日早朝に内灘町に着き、車中で仮眠しました。

②11月13日：

朝8時、内灘聖書教会で行われる能登ヘルプの朝のミーティングに出席。その場で持ち場とチームを紹介され、作業を行っていくうえでの諸注意が共有されました。みなで祈りを合わせたあとは、車に乗って輪島まで移動。半島の先端に向かって進めば進むほど、ダメージの大きさが増していきます。「能登里山海道」というハイウェイなのですが、道がところどころ上下にうねっており、スピードを出すことができません。聞けばこれでも随分回復したとのことと。記憶の糸をたぐれば、あの当時そこここで道路が寸断されていたことが思い出されます。結局2時間（通常は1時間、発災後、5月頃では3時間）かけて作業地に到着しました。輪島市はそこここに被災の爪痕が残っています。わたしたちの作業は、地震後自宅が倒壊したので、家族揃って身を寄せていた畑の中の農作業小屋。その暮らしの場を、豪雨災害が直撃し、床上浸水となったとのこと。そこで次回大雨が降ったときに備えて、50メートルの溝を堀り、川へと繋げる作業に取り組みました。

　昼食は、近隣にある「輪島聖書教会」の礼拝堂で食しました。われわれ以外にも２つのチームが休憩を取りに集まっていましたが、シンガポールの方や、ニュージーランドの方もおられ、実に国際色豊か。こんなにも多くの国々から被災地を「ヘルプ」しに来てくださっていることに感動するとともに、とても仲良くなることもできました。

　午後も同様の作業を進めた後、終了後は輪島の朝市跡を訪問させていただきました。発災後の焼け野原状態ではないものの、そこには広大な空き地が広がっていました。グーグルマップを使って以前の状態を確認しましたが、差は歴然としていました。人と建物と暮らしがごっそりと削り取られている。11ヶ月経ってもこんな状況であることに恐れを抱きました。これはわたしたちの街の近未来かもしれないのです。やりきれない思いを抱えて、宿泊地である能登聖書教会へと移動しました。

②11月14日：

　起床後朝のミーティング。教会の会堂守りの鳥井さんから今晩手料理の手巻き寿司を振る舞ってくださるとの提案があり、一同大喜び。１時間かけて車で昨日と同様の作業地に移動しました。昨日は気づかなかった亀裂やがけ崩れ、倒壊したお家などなど。滞在すればするほど、ダメージの大きさが伝わってきました。宮下さんの言葉を胸に抱きながら、14日中の側溝の完成を思い描いて、みなで力を合わせたお陰で、予想以上に作業がはかどりました。結果としては、溝の完成のみならず、作業小屋に残っていた汚泥の泥掻きもすべて終了させることができました。作業終了後、宮下さんからはみなに輪島塗のお箸のプレゼント。「これを見て、輪島を忘れず、思い出してください」との言葉が胸に残っています。心からのおもてなし料理をいただきながら、「きっとまた来ます」と心に誓いました。

太田直宏（QSAN）

関西学院大学卒業後、コンピュータ会社に勤務するも、どうにも企業の論理に馴染めず、1年半で退職。偶然にも手に取ったチラシに書かれた「フィリピンに行って井戸を掘ろう」という文言に惹かれてクリスマスワークキャンプに参加。最後に宿泊したマニラのホテルがYMCAであった。帰国後これまた偶然見かけた新聞広告で神戸YMCAに入職後、クリスチャンとなる。岡山に出向中に阪神淡路大震災が起こり、そのことを契機に移籍、2005年より代表理事となり、現在に至る。「たかがキャンプ、されどキャンプ、時にキャンプは人の人生を変えることもある。」と信じて、様々なキャンプを実践し続けている。

能登震災支援参加メンバーの感想

世界でも自然災害が多いと言われる日本。私が災害というものを認識したのは小学生2年生の時に発生した阪神・淡路大震災でした。それまで地震というものを知らなかった私は、地震発生直前になぜか目を覚まし、急に起こった強い揺れに驚いたとともに、すぐに部屋まで駆けつけた父親に「今のが地震だよ」と教えられたことを憶えています。当時、岡山市でも震度4の揺れを観測しました。私は未だにあの時以上の地震を経験したことがないため、今回の能登半島地震がどれほどの強い揺れだったのか、どれほどの恐怖だったのか想像もつきません。

ただ、岡山に住んでいると災害が少ないため、平和ボケをしてしまいがちです。私自身、高校生のときに台風の被害で祖父が亡くなったにもかかわらず、東日本や熊本、能登半島で災害が起こったときにも、どこか他人事になっている自分がいたように思います。

この度、能登半島を訪れ、はじめて災害支援の活動を行う機会を持つことができました。崩れてしまった建物・ひび割れ陥没した道路、閑散とした観光地などを目にした時、言葉になりませんでした。しかし、そんな中、被災された方々と話し、関わっていくと「絶望したくなる状況にもかかわらず、遠くの希望を目指して、前へと進んでいる」ということを強く感じました。

私たちは「被災地のことを忘れない」と簡単に言ってしまいます。しかし、日々の喧騒から、はたまた自分自身を取り巻く日常の平安さから、すぐに忘れてしまうことも多分にあります。また、新たな災害が起こった際に、能登半島地震は過去のものとなり、新たな災害に目を向けてしまいます。だからこそ、日々の祈りの中で「能登半島にお住まいの多くの方々が、悲しみをこらえながら、今日も希望にめがけて懸命に生きておられること」を憶えていきたいと思っています。

この度、現地の方と「いつか能登半島が復興した暁には、再度輪島市を訪れ、平和な町並みを観光します」と約束をしました。そんな日が一日も早く来ることを願っています。

YMCAせとうち　　認証主事　有安紀

Report of Noto Support Project

能登震災支援参加メンバーの感想

先日、石川県能登半島の被災地支援に参加し、2日間の作業を行いました。被災から1年が経とうとしていますが、現地の状況は想像以上に厳しいものでした。
今回の活動では、主に畑に溜まった泥を剥がし、それを土嚢袋に詰めて撤去する作業を行いました。また、二次被害の軽減を目的とした用水路の作成も担当しました。一見すると小さな作業に思えますが、泥は重く、手作業での処理は非常に骨の折れるものでした。私自身、西日本豪雨の際に真備町でボランティア活動を行った経験があり、その時の感覚を思い出す場面もありました。畑や家屋に入り込んだ泥が、日常生活や生産活動の再開をどれほど妨げているのかを実感し、復興の難しさを改めて感じました。
被災地を訪れる前は、1年も経てば復興が進んでいるだろうと漠然と考えていました。しかし、現場では手付かずの場所が多く、まるで時間が止まっているかのような状況でした。被害の大きさを目の当たりにし、想像していた復興のイメージとのギャップに驚かされました。
作業の合間に被災された方々と直接お話をする機会がありました。その中で、「被災してから、今までの日常が全て変わってしまった。災害前と変わらないところは正直ない」という言葉を聞いたとき、胸が締め付けられる思いがしました。災害が生活や地域の営みを根底から変えてしまう現実を改めて考えさせられました。一方で、被災地の方々が前向きに日々を生きようとしている姿勢には心を打たれ、支援活動の重要性を再認識しました。
さらに印象的だったのは、作業後に立ち寄ったお風呂での出来事です。体を洗っていると、地元の方に「県外から来られた方ですか？」と声をかけられました。その方と少し話をする中で、「こういう状況で、感謝の気持ちを上手く伝えられない人も多いんです。でも、本当にみんな感謝しています。遠いところから来てくださるおかげで、私たちも前を向こうという気持ちになれるんです」とおっしゃいました。その言葉には温かさがあり、助け合いやつながりの大切さを改めて感じました。
今回の経験を通じて、災害支援を継続して行うことが、被災地を応援し、勇気づける大切な方法だと実感しました。また、被災から時間が経過し、メディアで取り上げられることが少なくなっている現状を考えると、現地の状況をもっと発信していく必要性も強く感じました。こうした発信が、多くの人々に災害の現状を知ってもらうきっかけとなり、支援の輪を広げることにつながるのではないでしょうか。
支援の形はさまざまですが、現地での活動だけでなく、日常生活の中で災害に備えることや、被災地の状況を発信し続けることも支援の一環だと思います。
この経験を忘れず、今後も自分にできる形で支援を続けていきたいと思います。

YMCAせとうち　職員　難波勇吉

Report of Noto Support Project

能登震災支援参加メンバーの感想

今回能登の震災支援プロジェクトにお誘いいただき、初めて被災地支援のボランティア活動に2日間参加しました。私は今まで被災の経験はなく、幸運なことに被災の恐ろしさや苦しさを体験することなく暮らしてきました。

輪島には11月13日に行き、生まれて初めて被災地を目にしました。輪島に行く途中の道路が陥没していたり、土砂崩れが起こっていたりしていました。「あの土砂崩れが目の前で起こったらどうしよう。」と考えると、とても恐ろしかったです。他にも屋根が崩れ落ちた家や、斜めに歪んだ信号機・電信柱も見ました。想像していた以上に建物は崩壊し、車が建物の下敷きになっている場所もありました。見たことのない状況にとても驚き、「映画のセットなんじゃないか。」「作り物なんじゃないか。」と思ってしまい、表現しにくい不思議な気持ちになりました。

今回の作業内容は大雨により溜まった泥を取り除き、水路を作るというものでした。泥はとても粘着質で重く、臭いもきつかったです。泥をスコップで堀り、猫車で運びました。どの作業も楽な工程はなく、根気よく続けなければならないものでした。私が作業をしたのは2時間程度でしたが、それだけでも肩や腰、脚、手が痛くなりました。また天気も良かったのでかなり暑い中での作業になりました。2日間の作業で水路を完成させることができ、完成した水路を見た時の達成感は忘れられません。

2日間の活動を通して強く感じたことが、人との関わりの大切さです。今回このボランティア活動に参加していたのは私たちYMCAせとうちだけではなかったので、多くのボランティア参加者と協力しての作業でした。約50メートルの水路を作るという作業はみんなで協力しなければとても難しいものだったため、改めて人と協力することの重要性を感じました。また、作業中は会話を楽しむことも大切だなと感じました。大勢で協力して作業することは大切ですが、みんな無言で作業していてはきっとより苦しい時間になっていたと思います。初めて会う方との会話を楽しみながら作業をすることで、2日間やり遂げることができました。ボランティア活動はコミュニケーションツールの1つでもあるんだなと感じました。

大学生という年で被災地支援の体験ができたことは、とても幸運だったなと感じています。被災地を自分の目で見ることで、「誰かが支援をしてくれる」のではなく、「私ができることをしよう」と自分事として捉えることができました。

今回の貴重な体験を忘れることなく、周りの人たちに被災地の状況や支援活動の大切さを伝えていきたいなと思いました。

YMCAせとうち　ユース　根岸花奈

能登震災支援参加メンバーの感想

私は今まで大地震や大洪水などを体験したことはなく、身内や知り合いの中にも、大きな被害を受けた人はいません。テレビや新聞等で被害状況を見たり被災者の方の声を聞き、家族と「大変なことになってるよね」と話す、それで私は知った気になっていましたが、本当は何も分かっておらず他人事だったなととても感じました。今回、巨大地震と台風の洪水被害を同じ年に受けた能登半島へ復興支援に行きました。率直に「え？こんなにひどいん？」と思いました。約1年が経つのにも関わらず歩けば歩くほど、周りを見渡せば見渡すほど、ぐちゃぐちゃの道路や今にも倒れそうな家、1階がつぶれて2階しかない家、繁華街ぽいのに人影が０で寂しい道が広がっていました。私がテレビ等で見た被害の映像や写真よりもはるかにひどく思いもしない光景ばかりでした。私がいつも通り家族とおせちを食べていた頃に、この町は地震に家も大切な人も襲われていたのだなと、この今にも崩れそうな家がもし自分の家だったらと、この建物には笑顔で人が出入りしていたのだなと、この道は本当は沢山の人で賑わっていたのだなと、なんとも言えない悲しい気持ちになりました。

そんな大変な状況なのにも関わらず、能登で出会う人は皆とても元気で温かく素敵な人ばかりでした。支援活動をしている間に何度も「ありがとう」「元気をもらえる」と言われました。自分一人だけの力でも救われる人はいること、さらに多くの人たちが集まるとより大きな力になることを、今回の活動で改めて強く感じました。
今回私は、実際に連れていってくださる機会をいただいたので直接足を運び支援ができましたが、探せば幾らでも支援方法はあると思います。募金、被災地へ手紙や物資を送る、被害状況や助けたい気持ちをSNS等で書き声をあげることも立派な支援だと思います。日本ではいつ起きてもおかしくない大災害、被災者の方たちを勇気づけ守るためにできることを考え、実際に何らかの行動へと移すことが、私たちがするべきことだと強く感じました。
一日でも早い復興を願っています。

姫路YMCA　ユース　中上雅琳

Report of Noto Support Project

能登震災支援参加メンバーの感想

今回私は被災があった地域へのボランティアに初めて参加させていただきました。「いつか被災地へ自分が行って、少しでも役に立ちたい」と思っていたところにお誘いを受け、石川県輪島市に支援ボランティアに行きました。まず現地まで向かうために通った道路や街中がテレビで見ていたままの世界で、そこにあることに衝撃を受けました。よくテレビに映っていた横倒れになった大きなビルもまだその形がわかるほど残っていました。もうすぐ一年経とうとしているのにまだ復興がほとんど進んでいないことに驚きつつ、災害の大きさと自然の恐ろしさを再確認できました。

二日間の活動では畑のそばにある納屋に水が入らないように水路を作りました。全国各地からボランティアの方が来ており、何日も作業をされている方もいらっしゃいました。ここに集っている方は、みんな誰かのために何かをしたいと思った仲間なんだなと思うと、参加させてもらった側ですが心が温かくなり、より一層頑張ろうという気持ちが湧いてきました。納屋の持ち主である宮下さんや能登聖書協会の皆様にも温かく歓迎していただき、自分たちが被災し辛い中でも人に優しくできることにとても感銘を受けました。
私の地元は遠くない未来に大きな地震と津波がくると言われています。そんな状況になった時に私は何ができるのか、何を感じるのか。宮下さんのように前向きで隣の人を気遣える、そんな人になりたいと思った二日間でした。輪島市だけではなく他の地域でも地震や水害の爪痕は大きく残っていると聞きました。自分が今辛い思いをしている方々にできることは何かを考え行動に移して生活していきたいと思います。

二日間貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

YMCAせとうち　　ユース　　藤村夏帆

神の不在を嘆くのではなくて、

聖書のかみさまは「YHWH」という名前で呼ばれています。中世キリスト教では「エホバ（Jehovah）」と発音されていましたが、最近は「ヤハゥエ（Yahweh）」と言う発音が正しいと言う説が多いようです。これと似た名前で、最近注目されているのがGAFAという言葉です。そして、現代では「神さまは、ヤハゥエではなく、ガーファではないのか」という論争すらあるのです。GAFAとは、ご存じのGoogle・Amazon・Facebook・Appleのことです。伝統のYHWHの人気の低下に比べて、GAFAの影響は日々大きくなるばかりです。なんたってGAFAは応えることに間髪がありません。瞬時に求めるものを提示してくれるため、今やひとりひとり自分の手元に携え、迷ったときにはGAFAに聴いて回答を得るのが当たり前になってしまいました。もしやこれこそがフォースなのか？そう思っている人も多いのではないでしょうか。Googleは多くの疑問に瞬時に応えてくれます。Appleの美しさは多くの人を魅了します。Facebookは考えられない数の人を繋ぎ集団を形成し、Amazonは欲しい物を願えばすぐに手に入れることができるのです、しかも翌日には。何とすごいことでしょう。しかも今やそのインターフェースは、音声入力という言葉での祈りと変化してきています。例えばこんな風に「ヘイシリ、今何時ですか」「アレクサ、明日の天気は？」「OKグーグル、あなたの名前は」、そしてGAFAは、間髪を容れずにそれらの問に応えます。

一方のYHWHといえば、求めても応えず、祈っても聴かれない。GAFAの存在感に比べて、今や圧倒的にその求心力は低下しているように見えます。現代社会では、多くの人がこのGAFAにひれ伏しているようにまで見えます。しかしながら、GAFAとは何なのでしょうか？実はその正体はアルゴリズム、つまりプログラムなのです。要するに、それは人が生みだしたものに過ぎません。それゆえいかようにも人の手で改変することができます。事実いま、さまざまな問題が起こっています。大統領選挙や、兵庫県の知事選挙でもその影響が大きいことがわかります。わたしたちは人の手で創り出された、金の子牛にひれ伏しているのと変わらない状態に陥っているのです。

今も生きて働く神さまを喜びたい。

　そのように「自分に都合の良い神を拝む状態が続く」と当然ですが、人間の思い通りに行かないことが訪れ、人々は神の不在という問題に直面します。長い歴史の中では、往々にしてそのようなことがあります。ユダヤ人たちの中にはホロコーストの後、 彼らの神が民を見捨てた（思い通りにならない）ことを恨み、信仰を棄てようとするものが相次いだそうです。彼らに向かって哲学者エマニュエルレヴィナスはこう言いました。「あなたがたは善行を行えば報償を与え、悪行を行えば懲罰を下す、そのような単純な神を信じていたのか。 だとしたら、あなたがたは「幼児の神」を天空に戴いていたことになる。だが、「成人の神」はそのようなものではない。「成人の神」とは、人間が人間に対して行ったすべての不正は、 いかなる天上的な介入も抜きで、人間の手で正さなければならないと考えるような 人間の成熟をこそ求める神だからである。もし、神がその威徳にふさわしいものであるとすれば、 神は人間に霊的成熟を求めるはずである。神の不在に耐え、 人間が人間に対して犯した罪の償いを神に委ねることをしない 成熟した人間を求めるはずである。」

　ここには、聖書の神さまが、一見お答えにならない理由が明確に語られています。YHWHは、ご自分の姿に似せて我々を創造されたと聖書に書かれています。つまり、そもそもわれわれは、生まれながらにして「自分の力で物事を判断し、解決する力を持つように創造されている」わけです。そう、わたしたちは、YHWHの類比としての存在なのです。主客は明らかに転置されています。神さまこそがわたしたちを創ったのです。

　災害の発生した場所に立たされると、つい「なぜ神はこのようなことをなされるのか？いやもはや神も仏もないものか」と悲嘆にくれそうになります。しかしながらそのような場所だからこそ、世界から多くの方がボランティアとして遣わされてきます。わたしたちはそこに神さまの類比、似姿を見ることができるのです。「世の中、捨てたものじゃない、ここにこそ、神さまは今も生きて働いてくださっている」と。今回の能登で出会わせていただいたのもまさにそのような光景でした。まだまだ苦難は続きますが、ともに知恵を合わせて乗り越えていくのだと感じた能登での支援活動でした。

YMCAせとうち　総主事　太田直宏

能登震災支援プロジェクトレポート

と　き：2024年1月16日～20日

勝間光洋（YMCAせとうち職員）

1.再び、能登へ

YMCAの支援活動とは別行動となりましたが，YMCAの方々が行った後に能登を訪れたときの報告です。

１月に七尾市に学校支援に入ってから10か月。もう一度，七尾市に向かうことができました。今回は，石川県シェアリングネイチャー協会のセミナーと協会が進めている支援活動に参加という形での石川県入りでした。シェアリングネイチャー協会が進めている災害復興支援は，被災地における子どもたちの遊び場づくりとしてのネイチャーゲーム実施と仮設住宅に住んでおられる方対象に「お茶会『よってかし～』」を実施し，少しでもほっとできる居場所を作ろうとするものです。

１１月１７日は，その「よってかし～」の２回目の日です。場所は七尾市能登島です。七尾市は，地震でも大きな被害がありましたが，９月の豪雨では被災することもなかったようです。しかし，未だ市内の道路や建物が１月と変わらない状況のところも数多くあり，能登島の海岸や港もひどい状態のままでした。

活動地：石川県七尾市能登島仮設住宅

構成員：石川県シェアリングネイチャー協会構成員・勝間光洋（職員）

　会場は，能登島小学校のすぐ近くにある仮設住宅です。集会所前にテントをはり，お茶席を設けました。１１月でも暖かな日だったので，外でも寒さは感じなかったです。「よってかし～」のお茶菓子は，全国のシェアリングネイチャーの仲間が送ってくださった物です。全国各地から手紙と一緒に送られていました。それらのお菓子を並べると，「全国のお土産物産展」のような感じです。このようなお茶会は，東日本大震災の時に始まり，被災された地域のお年寄りには大変好評だったようです。

始まると，次々に集まってこられ，お茶を飲み飲み，話に花を咲かせていました。私達はお茶やお菓子を提供し，お話を聴くことが大切な役割です。初めは遠慮している方も，お土産の「きび団子」の話から，いろいろと話が膨らみ，昔話以外に，地震の時に家の下敷きになって助けてもらったこと，今困っていること，これから先不安など，今の問題に直面している話をされました。日頃，話をする機会が少ないのか，おしゃべりがどんどん進みます。話を聞いても自分が解決してあげることは何一つないのですが，話し終えた表情がスッキリされているのを見て，これでいいんだろうなと思っていました。お相手させてもらって、本当によかったと思います。

　このような場を長く続けていきたいようで　すが，自分がいつも参加できることもありません。お菓子の支援だけでなく，何か自分ができるものを考えていきたいと思います。その翌日は，１月に支援に入った七尾市の学校を巡り，校長先生方と話をしたり，市教委の方と話をしたりしました。１月からのご苦労を思うと，本当に頭が下がる思いです。応援するつもりで訪ねたのに，逆に多くの方から１月の支援に対しての感謝を伝えられ，温かい気持ちで七尾市を離れることができました。その後は，輪島市に向かい，知人を訪ねました，目に映る景色に呆然としてしまったり，知人の嘆きに胸を詰まらせたりして，この場を離れてしまう自分に後ろめたさを感じながら輪島を後にしました。知人が「私達より，この地で暮らす，未来ある子どもたちがかわいそう。」とずっと言い続けていました。自分は晴れているけれど，どんな形であれ，自分にできる支援はあるはずです。何かしなければという強い思いを抱きながら，今回の能登訪問を終えました。

勝間光洋

岡山大学卒業後、教員となり岡山県内の小学校で勤務。キャリアの最後は矢掛幼稚園・小学校校長として活躍。在任中西日本豪雨災害を体験。教員時代ネイチャーゲームと出会い、現在岡山県シェアリングネイチャー協会事務局長。23年4月よりYMCAせとうち職員として、倉敷市自然の家に勤務し、現在に至る。愛称かっちゃん・特技は腹話術。